父親の協力を促す子育て支援
−調理教室の試み−

木澤光子*，長屋郁子**，三輪聖子*

*岐阜女子大学家政学部生活科学科　**岐阜女子大学家政学部健康栄養学科

（2015年1月30日受理）

Child Care Support to Promote Cooperation of Father
−An Attempt of a Cooking Class−

KIZAWA Mitsuko, NAGAYA Ikuko, MIWA Satoko

*Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
**Department of Health and Nutrition, Faculty of Home Economics
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501−2592)

(Received January 30, 2015)

In this study, a cooking class was held to fathers, and their families tasted the dishes together, then we send a questionnaire to Fathers and Mothers who participated in the event. As a result, there were satisfied with the event. Mothers gave especially high scores. This study showed that cooking is one of house chores in which mothers want fathers to cooperate and fathers would participate in such events if they are encouraged to do so.

キーワード：子育て支援（child care support），父親の協力（cooperation of father），調理（cooking），母親の満足（mother's satisfaction）

1　はじめに

子育てをするうえで，父親の協力が重要であることは誰もが周知のことである。母親にとって精神的な支えとしての父親の存在の意味を調査したものに，恒次欣也ら（1997）の報告がある。恒次は，母親が父親に求めていることとして，相談相手，精神的支持をあげているということを明らかにした。

また，父親が子育てに関わることで，子どもの発達や精神的安定に大きな影響を与えることは誰もが知るところとなってきた。中野由美子（1992）は，父親との関わりが多い子どもの自発性の高さや言葉量の多さを見出している。また父親が子どもと関わる時間が長いと，子どもの抑うつ傾向が低いとの報告も

ある（平成10年度厚生白書）。

父親が子育てに母親とともに関わることの重要性は今や自明と考えて良いと思うが，必ずしもそれは世論とはなっていないようである。父親がなかなか育児に参加できないのは，長い間母親だけに育児を任せてきた日本の政策と無縁ではない。いまだに子どもを産む性である女性が子育ての中心的存在であり，父親は補助であるとの考え方が主流ではないだろうか。確かに父親と母親の役割は異なる。それは，それぞれが子どもに対して固有の存在の意味を持っているということであり，母親だけでなく父親の存在の意味を感じ取れるような子どもとの関わりができる場面が必要だということでもある。

父親が主体的に自分の存在の意味を主張できる場面が明らかになれば，父親はもっと育児の場面に参画できるのではないだろうか。

そこで筆者らは，これまで父親と母親が子育てをする上でどのようなことについて困っているのか，父親の育児参加を促す企画はどのようなものが望ましいのか，またどのような方法で行うのが良いのかを明らかにするために調査をしてきた。今回の報告では，父親のための調理教室を実施し，父親が参加しやすい企画かどうかを検証し，今後の子育て支援の手がかりを得たい。

2 方法

1）調査対象及び手続

調査対象者は大学で行っている子育て支援ママパパアゴラの1企画である「パパすクッキング＆」に参加した父親7人と母親7人の14人である。父親の年齢区分は，表1のように20歳代が1人，30歳～34歳が2人，35歳～39歳が3人，40歳～44歳が1人である。また母親は20歳代が3人，30歳～34歳が1人，35歳～39歳3人であった。父親は30歳代が多く，母親は全員20歳代から30歳代である。また子どもの生まれたときの年齢は，父親の場合，30歳代で初めての子どもが誕生する人が多く，母親も30歳前後で出産している人が多い。

表2は，調査対象者7組それぞれの子どもの月齢・年齢である。調査対象時に子どもが1人の人は5組であった。

表1 父親・母親の年齢

事例	父親の年齢	母親の年齢
A	30代	20代
B	40代	30代
C	30代	30代
D	30代	30代
E	30代	20代
F	30代	30代
G	20代	20代

なお，調査対象者には，調査の協力の依頼をはがき及び口頭でお願いし了承を得ている。

調査時期及び場所は，平成26年7月26日，岐阜女子大学4号館調理室で父親は調理を行った。調理は，3人と4人の2つのグループに分かれ，全員すべての料理を作るが，食材の下ごしらえなどは，手の空いている人がグループ分をまとめて行うこともある。

表2 子どもの月齢・年齢

事例	子どもの月齢・年齢		
A	1歳		
B	4歳	1歳	
C	9か月		
D	2歳		
E	4歳	2歳	10か月
F	2歳		
G	2歳		

また母親と子どもは，岐阜女子大学5号館の保育ルームで，学生の読み聞かせ等のパフォーマンスを見た後，試食までの時間自由に過ごすようにした。父親の調理が終了する頃に移動し合流した。

質問紙は，家族そろって試食をするときに，父親と母親に質問紙を配布し，その場で回答してもらった。回答用紙は，帰りがけに出入り口で学生が回収した。

調査者は，調理教室の参加者の様子及び家族でそろっての試食場面を離れた場所で観察した。

記録方法は，時系列に沿って要約記録を行った。

2）調査内容

年齢，性別，住んでいる所などフェースシートをつけ，子育てで悩むことは何か，欲しい支援，本企画に参加しようとした理由についての質問を設け，それぞれ選択肢の中から選ぶようにした。また，参加満足度，参加者同士の会話，内容の良さ，人数の規模について「当てはまる」「少し当てはまる」「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の5件法で回答を求めた。また最後に自由に意見を書けるようにした。

調査者の観察内容は，参加者の人間関係，困っていること，良いこと，調理技術，母親と子どもが入ってきたときの父親の反応，母親と子どもの反応，試食中の交流の様子等についてである。

3　結果及び考察

1）子育ての悩み

子育てで悩むことは何かの問いに「子どものことがわからない」「育て方」「身長・体重など身体的なこと」「子どもの健康」「子どもの性質」「子どもの発達」「子どもとの遊び方」「子どもの食事」「夫婦間の考え方の違い」「協力者がない」「ママパパなど友人関係」「その他」から当てはまるものすべてに○をつけてもらった。その結果図1に示したように，「子どもの育て方」「子どもの食事」について父親母親ともに7人中4人が○をつけていた。母親のみならず父親にとっても育児や食事など技術的なことが悩みとなっている。また，父親は子どもとの遊び方について悩むと答え

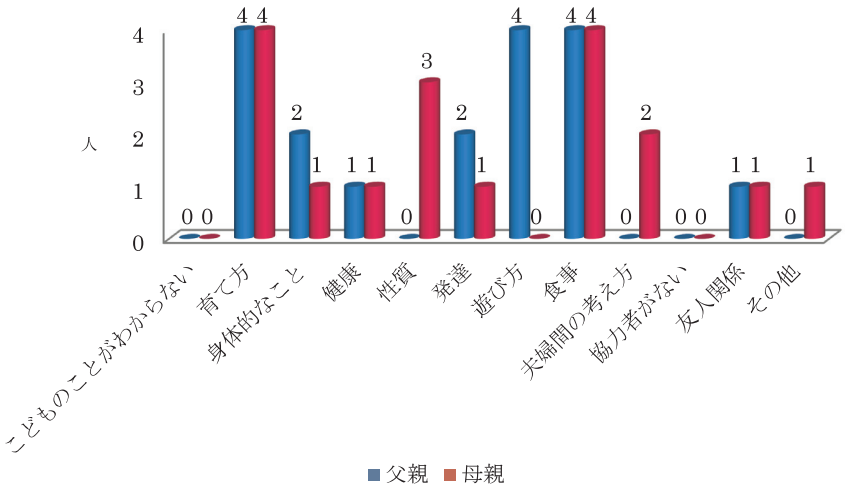

図1　父母別に見た子育ての悩み

た人が4人いた。それに対し母親の方が高い悩みは，子どもの性質（3人）と夫婦間の考え方の違い(2人)である。父親の悩みは行動・活動に関してであり，母親の悩みは内面・精神的な問題に関してである。

このような父親の特性を考えると，調理技術を習得するための本企画は，父親の行動・活動に関する興味指向と相性が良く，参加しやすい企画であると考えられる。子どもの性質や夫婦間の考え方の違いに悩む母親にとっては，普段母親が行う離乳食作りを父親がすることで，問題を共有することを求めていると言えるかもしれない。

2）参加理由

本企画に参加しようと思った理由について，「講座内容に興味があった」「他のママパパと知り合いたい」「リフレッシュ」「家族で参加できる」「料理が好き」「仕事が休み」「人数が少ない」「配偶者に勧められた」「その他」から2つ選んでもらった。その結果図2のように，父親は「配偶者に勧められた」人が7人全員であり，さらに講座の内容に「興味があった」「家族で参加できる」と回答した人が2人ずついた。参加した父親の中で「料理が好き」という人はないが，配偶者の勧めにより参加をしているものの，もともと興味がある内容であることや家族で参加できるなど第一義的動機となる魅力を感じての参加が多い。しかし逆に言えば，料理に興味があったり，家族で参加できる内容であっても，母親が積極的でないと父親の参加は促されないと考えられる。

一方母親は，「講座内容に興味があった」5人，「家族で参加できる」が5人であった。母親が父親の子ども食を作るという講座内容に興味を持つというのは，日常生活の食事作りの負担を担って欲しいという気持ちがあるのではないかと考えられる。父親を主体とした子育て支援は，母親自身が父親に協力をして欲しい領域を設定することが重要である。

3）参加満足度

「参加して良かったか」という問いに対し「当てはまる」「少し当てはまる」「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」「当てはまる」の5件法で選択してもらった。その結果は図3のとおりである。

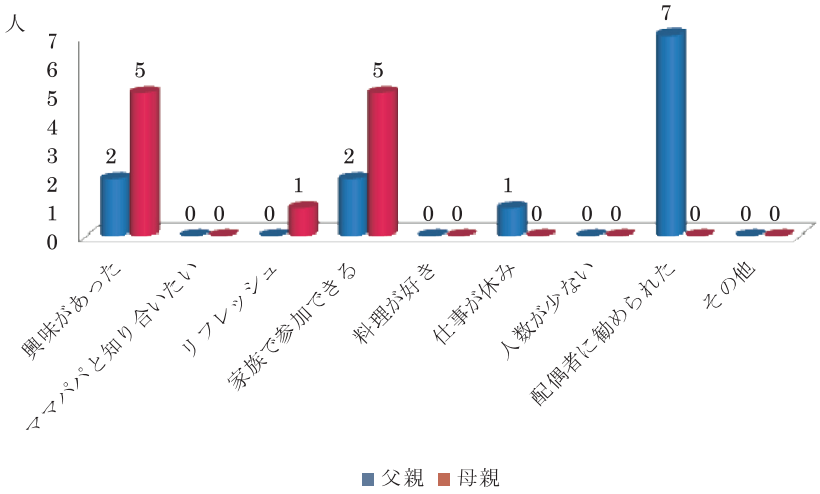

図2　父母別に見た参加理由

父親の7人中6人が「当てはまる」，1人が「少しあてはまる」と回答していた。「少し当てはまる」と答えた人は，開始時間に間に合わず遅れて到着し，参加直後は何をしていいのかわからず戸惑っている様子が見られた。

また，母親の7人中7人全員が「参加して良かった」と答えている。父親も母親も本企画に対し，満足度が高かった。

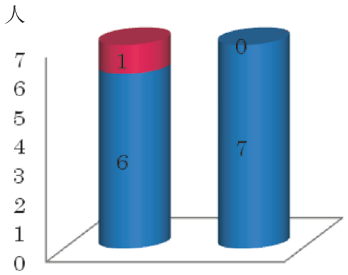

図3　父母別に見た参加満足度

4）人数の規模

本企画は7人の父親の参加があった。人数の適正について尋ねたところ，人数が少ないのが良いと回答した人は7人中6人であった（図4）。父親1人が「少し良い」と回答し，本回答者は図3の満足度で「少し当てはまる」と回答していた。「最初から参加できればよかった」と自由記述欄に記述し，途中からの参加による居心地の悪さがあったのではないかと思われる。人数が少ないことは良いと思っており，満足度との関連の高い項目である。

本企画は，7名と言う少人数企画で，講師は1人である。問題については臨機応変に対応していたが，3）参加満足度でも述べたように遅刻した参加者が困っている様子があり，講師1人では対応が難しかった。すべての参加者の困り感に適宜に対応するためには，少人数であっても講師の他に補助者が必要である。

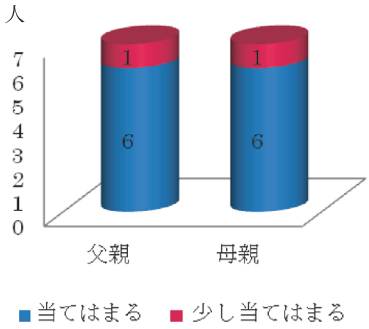

図4　人数の規模

5）自由記述

自由記述には2人の父親の意見感想があった。記載内容は次のとおりである。

・普段料理をしていない男親が困ることは，嫁が急病になり，冷蔵庫のありあわせで何か作ってほしいと言われたことです。(何が入っているのか，何を作ることができるかわからないので）冷蔵庫のありあわせで作れるものを教えていただきたいです。

・もう一度焼きおにぎりにリベンジしたい

母親の自由記述は6人で，次のような意見があった。

・普段夫に料理をさせないのですが，楽しかったそうなので，たまにはいろいろ気にせず任せて“お父さんスゴイ”って言ってあげられる機会を持ちたいと思えました。

・大満足です。

・家族で参加できるのが本当に嬉しいです。少ない人数で，次回も参加できると嬉しいです。

・パパと子どもで作れて楽しい。

・このような企画はあまり見たことがないので参加できてうれしいです。

・はじめチラシを持ってきたとき，旦那は絶対「やりたくない」と言うと思っていましたが，いい返事をもらえたのでとても今日が楽しみでした。

・パパが作ったご飯もおいしくて，かわいかったです。家でも作ってみようと思います。子どももおいしいそうに楽しそうに食べていてよかったです。

「楽しい」「よかった」「満足」と言う言葉にみられるように，母親の評価が非常に高い。また，父親が楽しんでいる様子や活躍を見て，母親の父親への見方が変わる経験になったと思われた。

父親は，「焼きおにぎりにリベンジしたい」「ありあわせのもので作れるものを知りたい」など料理への関心が高まったことが伺われる。

総合考察

これまでの研究で，父親と母親が子育てをする上でどのようなことについて困っているのか，父親の育児参加を促す企画はどのようなものが望ましいのか，またどのような方法で行うのが良いのかを明らかにしようとしてきた。今回は父親のための調理教室を実施し，父親が参加しやすい企画かどうか検証し，父親母親が求める子育て支援とは何か，手がかりを得るために行った。

父親の悩みは行動・活動に関してであり，母親の悩みは内面・精神的な問題に関してである。このような父親の特性から考えると，調理技術を習得するための本企画は，父親の行動・活動に関する興味指向に向く企画であると考えられた。子どもの性質や夫婦間の考え方の違いに悩む母親にとっては，普段母親が行う子ども食作りを父親がすることで問題を共有でき，非常に満足度が高かった。

父親は母親に勧められて本企画に参加しており，母親にとって子ども食を作るということに協力して欲しい領域であることが明らかになった。また父親が主体的に参加するのではなく勧められての参加であることから，母親が父親の協力を期待する領域の企画設定が重要である。

本企画は，少人数定員の企画で講師は1人である。すべての実習生の困り感に適宜に対応するためには少人数であっても講師の他に補助者が必要である。

母親の評価が非常に高かった。父親が楽しんでいる様子や活躍を見て，母親の父親への見方が変わる経験になったと思われた。また父親も調理体験で料理への関心が高まったことが伺われた。

調理は母親に任せられることの多いジェンダーを感じさせる家事であるが，経験してみると楽しかったなど父親の評価は高い。昨今，職場に自分の手作りのお弁当を持ってくるお弁当男子が話題になるなど，料理に関心の高い男性が増えていると言われる。どちらかが担当するのではなく，母親と父親が協力してできる領域としても提案できるのではないだろうか。

引用参考文献

1）青木康子　加藤尚美　平澤美恵子　第3版助産学大系　母子の心理・社会学　日本看護協会出版社　2002

2）花沢成一　母性心理学　医学出版　1992

3）木澤光子　長屋郁子　三輪聖子　子育て支援マママパパアゴラ「らくちん子ども食」の取り組み―参加動機と満足に影響する要因―　岐阜女子大学食文化研究　第1号　岐阜女子大学食文化開発支援センター　pp. 19～26　2013

4）厚生省　厚生白書　平成10年度版　1998

5）宮川剛「こころ」は遺伝子でどこまで決まるのか　パーソナルゲノム時代の脳科学　NHK出版　2011

6）中野由美子　3歳児の発達と父子関係　家庭教育研究所紀要　14　pp. 124-129　1992

7）岡宏子　小倉清　上出弘之　福田垂穂　親子関係の理論①成立と発達　岩崎学術出版社　1984

8）恒次欽也　川井尚　庄司順一　育児における父

親の役割に関する調査研究(1)―単純集計と両親の比較を通して―　愛知教育大学研究報告　46（教育科学編）pp. 105−113　1997

9）山添正「父性」の立て直し「母性」のみなおし　子どもの自我発達への援助　ブレーン社　1997